
コーネリア ～人形と神様の子供～

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コーネリア〜人形と神様の子供〜

【Nコード】

N1088K

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

王国の虐殺令で殺されたコーネリアという赤子。

人形師の両親は嘆き悲しみ、大きくなったコーネリアの姿を想像し、その想像を元に一つの人形を製作しました。

両親の愛が込められた魔力を動力とする魂を持つ人形「コーネリア」しかし彼女はとある事情から、自分が本物のコーネリアになれぬ事に複雑な感情を持っていました。

そんな「コーネリア」の下に、殺されたオリジナルのコーネリアが現れて……

第一話

**

第一の欠片 子供の詩

時間に鍵をかけて。

神様に祝福されて。

生まれた私たち。

私は私。

私と名乗る貴方。

貴方は私のなり損ない。

私はお父さんには見えない。

死者でないから。死者なのに。

**

「コーネリア、コーネリア」

肩をゆすられてコーネリアは目を覚まします。南向きの窓のそばに椅子を置いて、外を眺めていたのですが、日の暖かさについてぼんやりしていました。

「どうしたのですか、お父さん」

コーネリアは起こしてくれたお父さんを見ながら、首を傾げました。

「母さんの部屋を綺麗にしてくれないか」

コーネリアは頷き、お父さんを見ました。

「分かりました。すぐにします」

「ああ、掃除が終わったならごはんもよろしく頼むよ。夜に人が来るんでね、早めに作ってほしい」

コーネリアは頷き、着ていた白い上着のボタンを丁寧に外しました。なめらかで、とても人形には見えない程の美しい木肌をさらしながら

ら、コーネリアはクローゼットの中から白黒のエプロンドレスを取り出しました。

「コーネリア、とても可愛い服じゃありませんか。コーネリアは嬉しいです」

鏡を覗き胸元のリボンの位置を調節しながらコーネリアは呟きました。少しでも気分を盛り上げなければ、心が痛いのです。

この白黒のエプロンドレスを着ると、コーネリアはお母さんが首を吊る前によくやった、お母さんの幻覚に付き合う遊びを思い出しました。確か、この服を着る時は自分が召使いでした。お母さんは大貴族の奥様でした。

「奥様。何でございますか」

コーネリアはお母さんを見つけると、きちんとした姿勢でお辞儀しました。

お母さんは人形制作中に余った衣装の端切れで作ったように見える扇で、優雅に扇ぎながら言いました。

「ああ、ジル。コーネリアが泣き出してしまっているみたいだね。機嫌が悪いみたい、慰めなさい」

こくりと頷きながら、コーネリアは言いました。

「はい、かしこまりました。奥様」

お母さんは腰元がふくらとしたドレスを着て優雅に歩いていきました。ドレスはばらばらの生地をつなぎ合わせでした。コーネリアの家はそんなに裕福ではありません。しかしコーネリアの持つ服は、決して端切れ布を利用したものではなく、町の布商人からきちんと買ってきて作られています。

コーネリアの身体は二人の気持ちが込もった一品物なのです。本当のコーネリアが入るために作られたものです。

コーネリアはお母さんの部屋に入りました。

ベッドの上には、小さな人形が寝かされています。子供の玩具として作られたでしょう。毛糸の髪の毛、ボタンの目、さわるとこわごわする生地、端切れ布で作られた服を着ています。

コーネリアはこの人形を見る度に感謝の気持ちと、疎ましい気持ちとすらやましい気持ちがせめぎあい、少し気持ちが沈みます。かつてコーネリアの愛した人形で、今はお母さんにとってのコーネリア。お母さんは部屋の入り口にいて、コーネリアとコーネリアを心配そうに、監視をするようにじいじと見えています。

きつとジルが職務放棄しないか心配しているのでしょう。お母さんの人格はたくさんですが、どの人格も疑心暗鬼が底にあります。

コーネリアはゆっくり子守歌を歌いました。

それはお母さんの故郷の歌です。

コーネリアに向かって歌うのを、何度もコーネリアは聞いていて、いつのまにか歌えるようになりました。

そうするとほうと息をつく音が聞こえました。お母さんは扇を額に当てていました。重荷がとれたような顔をしています。

ようやく安心したようで、お母さんはコーネリアの元に近づいていました。

「あらユーシア。コーネリアと遊んでくれたの？　コーネリア、お姉ちゃんと遊んでもらって良かったわねえ」

コーネリアはコーネリアと仲の良い近所のお姉さん役になりました。コーネリアは言いました。

「はい。コーネリアがぐずついでいて。でもさすがですね。コーネリア、お母さんが来たら、すぐに機嫌が直ってしまいました」

「自分で言うのもなんだけど……お母さん子なのよね。コーネリアは」

コーネリアはお母さんのくるくる変わる認識の元、たくさん役を演じます。けれどもコーネリアはお母さんの娘という役を演じたことがありません。それはいつでも自分よりずっと粗末な人形、コー

ネリアが担っているのです。

コーネリアは自分がコーネリアになれないとよく理解しています。お父さんもお母さんもコーネリアがコーネリアになれないことを知っています。コーネリアに込められた魂は、コーネリアではない、ローズマリーというつたない人形の魂でしかなかったのです。

コーネリアはお母さんがコーネリアを抱いて子守歌を歌い出すのを見届けると、そっと部屋を出ていきました。

コーネリアはお母さんを愛しています。

だけでも……お母さんはコーネリアを娘として見てくれません。

正直なところ二年前お母さんが死んで悲しかったのですが、同時にこの遊びをしなくてすむと思うと胸をなで下ろしました。

お母さんにコーネリアと呼ばれた粗末な人形に比べてコーネリアはずっと人間らしい人形です。生前のコーネリアが成長したら、きっとこうなっていたのだろうと考えられて作られました。ぎこちないですが表情を作ること出来ます。魔法によって魂を定着させ、声も出せます。なめらかな白い木肌は触らなければ人形だと思われないうでしょう。ここまで完璧で、でも……駄目で、お母さんは自殺してしまいました。

コーネリアはよく思います。

愛されたい。寂しいのはもう嫌。

娘という唯一無二のものになりたいと。

掃除を終えると台所にコーネリアは向かいました。料理はあまり得意ではありませんが、食べられない料理を作る程ひどい腕ではありませんでした。味というものが分からないので、どうしても調味料

の量で味を決めてしまったためでしょう。コーネリアは買い置きのパンを切り、簡単なスープを作りました。

それからお父さん呼びました。

「お父さん。ごはんです」

「ああ。今行くよ」

お父さんはごはんをもくもくと食べます。

「お父さん。味はいかがですか？」

「家族にいかがつてどうなんだい」

「あ、はい。どう、ですか？」

コーネリアは恥ずかしそうに頭を下げ、訂正しました。

「あ、そういえば掃除速かったね」

「もう何度もしているから、どう掃除すればいいかコツを掴みました」

「そうか、そうだな。もう二年か」

ふうと一つ息をお父さんはつきました。

お母さんが狂って自殺した最大の理由は、コーネリアにコーネリアではない自分の魂が宿ったことにありました。

十年前に虐殺令というものが出たそうです。

何でも預言者の聖人が生まれるという発言が元で、その可能性のある幼子は皆殺せという王の命令が出たそうです。お母さんは必死に子を守るうとしました。ただど家に荒々しく踏み込んできた血の滴る抜き身の刀剣を持った鎧兵は、コーネリアを抱きしめるお母さんからコーネリアを引きはがして、刺しました。お母さんの顔は返り血に染まりました。

お母さんから引き離され、足首を捕まれたコーネリアは喉を一刺しされて、殺されたそうです。お父さんはコーネリアとお母さんを助けたかったのですが、他の兵に身体を押さえられ、何も出来なかったそうです。

無惨に勝手な命令で殺されたコーネリア。

お母さんとお父さんは悲しくて、きつとこんな姿になったのだろうと想定した人形を七年かけて作りました。

とても精緻な人形でした。愛の込められた人形でした。

だけど二人の心は満たされません。

コーネリアに会いたい。

きつと大きくなったらこんな姿になっていただろうに。

どうして、どうして……何も話してくれないんだい？ 触れてくれないんだ。抱きしめても冷たいよ。

ああ……分かつているんだ。人形じゃ意味がないんだ。コー

ネリアじゃなきゃ嫌なんだ。

だから、だから。コーネリアを取り戻すためなら私たちは何でもしよう。あいつらが預言者の言葉一つという勝手な理屈でコーネリアを殺すなら。私たちも……

そして三年前、コーネリアは目を開けました。

初めの頃コーネリアはどうやって自分の身体となった人形に魂を定着させたのか知りませんでした。しかし知る前から、きつと恐ろしいことをしたのだろうという予測はついていました。

コーネリアは何故ここに存在出来るのでしょうか。コーネリアは今も昔も人形でした。神様の本によれば、それは尋常なことではないそうです。悪魔の所行だそうです。

尋常なことでない、悪魔の所行……言葉を辞書で調べても、コーネリアはこの深刻さを良く理解出来ません。

ただ自分がこうして動くようになった時には、お父さんはさびた鉄のような臭いが常に手から抜けませんでした。そしてお母さんは深刻な狂気と罪悪感に心が侵されていました。やがて現実を認識出来なくなりました。

お父さんは言いました。

「コーネリア。今日の客人は泊まりになるだろう。部屋の用意を頼むよ」

「はい。分かりました。他に用意する物はありませんか」

「それは後で話す」

「はい……」

自然に声のトーンは重くなります。

またお客様がやってくる。また……

ぽんぽんと優しくたたくように頭を撫でられました。

「お、父さん？」

「もう少しだよ。コーネリア。君の新しい身体はもう完成に近付いているんだ。今度こそ完璧にコーネリアの魂を君の今の身体に定着させる。そして君の魂を新しい身体に。そうしたらね、完璧だ。私たちは本当の家族になれるよ」

「……コーネリアは一つ思うことがあります。コーネリアは、目を開けたらどう思うでしょうか」

お父さんは不思議そうに首を傾げました。

「喜ぶさ。だってまた家族に会える。新しい家族もいる」

「……神様はお許しになるのでしょうか」

「神様は酷いことを言うだけさ。だから私たちが何とかするしかない」

「……部屋の用意をしますね」

コーネリアはお父さんの言葉から逃げるように、来客用の部屋に向かいました。

嬉しくないわけではないのです。

家族として認められていることに。

けれども、何としてもコーネリアを呼び戻すというお父さんの意志を感じると、コーネリアは自分のコーネリアとしての出来の悪さ

に絶望を覚えました。

第二の欠片 王の近親者の十年前の虐殺についての感想

「結局、聖人となる子供は判別出来なかった。全員殺してしまったから。しかしその年イナゴが小麦畑を襲いだして、数年飢饉状態だったと考えると、あの時足手まといになりかねない幼子がいらない状態は、被害を軽減させた。国力の復活も早かった。またあの異教を祀る村に対する良い制裁理由が出来たし、上々の行動だった」

第一話（後書き）

よろしくお願いします。

第二話

客室の準備をすると、コーネリアは家の裏にある井戸に水を汲みに行きました。コーネリアとお父さんの住む家は町外れにある森の奥まった場所にひっそりと建っていました。

落葉樹の若い葉が、日光を透かしながら優しく風に揺れています。

井戸の脇には石が積み上げられただけの、墓がありました。

コーネリアは一輪の赤い花を供えました。

すると井戸の影から、白いワンピースを着て、金のりんぷんを纏った十歳程の子供が現れました。

「今日も言えなかったの。いくじなし」

「コーネリア、いたのですか」

コーネリアは、少し目を開いて言いました。

「ずっと、お父さんとお母さんに張り付いているわけじゃないもん。それよりもさっきの神様はどうたらって何！？ 貴方は本当、ばっかばかのばかばかだよ！ 私はもう神様の子供なんだから、お父さんの元に帰られないんだって、さっさと言っちゃえよ、言ってしまうよ」

「あの、あの。コーネリア。そんなことを言われたら、お父さんやお母さんどう思うでしょうか。その……悲しむとか怒るとか、そんな感情を吹き飛ばしてしまう程の絶望にたたき込んでしまう言葉だと思ってしまうのです。その、自殺しかねませんよ」

「いいの！ 遅かれ早かれお父さんは死んじゃうの。人を殺した咎で制裁されちゃう運命なの。自殺だろうが処刑だろうが、関係ないでしょ！ 殺人は神様への逆行行為、この世の最大の悪！ せ、せめて自分で死に方、選ばせることこそ、感謝しろっていう話なんだよ！」

肩をぶるぶる震えさせながら、すごい剣幕でコーネリア、オリジナルの精霊は言いました。

数日前のことです。

コーネリアは井戸のそばにあるコーネリアの遺体が埋められた小さな墓にいつもの癖で花を供えました。

お父さんはあまりここに近寄ろうとしません。水をどうしても自分で汲まなければならなくなった時だけ、来るのみでした。

いつの頃か、遺体とはいえ本物のコーネリアが放置されていることに、コーネリアは心が痛みました。コーネリアはローズマリーと呼ばれた時代に、コーネリアの墓と同じくらい粗末に放置されていたことがあったからです。

初めは低い草だらけで、起伏にしか見えなかったコーネリアの墓を整備して、木の十字架を立てました。途中で十字架はお父さんに折られたので石を積み上げたものに変更となりましたが、コーネリアはコーネリアの墓を大切にしていました。

花を供えて祈りを捧げ、コーネリアが井戸の水を汲んでいると、唐突に声をかけられました。

「お人形が一丁前に、お祈りするの？」

コーネリアは驚いて声のした方を見ました。そこには十歳程度のコーネリアによく似た、白いワンピースを着た少女がいました。

「だ、だめでしょうか」

「うん、変。何か中途半端に人間くさくて、変。あんた、生まれちゃいけないもののように。空の上じゃお父さんが悪魔って呼ばれているんだよ」

悪魔とは、何て失礼な言葉でしょうか。コーネリアは言いました。

「お父さんを悪く言わないでください」

「そのお父さんが悪いことをしているって理解しているのに、変なこと言うね。うそつきーうそつきい」

コーネリアは頭に自分の身体を動かす魔力が集まるのを感じて、頭が軋むような音を立てるのを聞きました。ああもう完璧に怒ってい

ます。

「こ、子供とはいえ許せないです。いったい、誰から生まれたらそんな言葉になるんでしょうか」

「貴方のお父さんとお母さん」

真面目な顔で少女は言いました。

「何言っているんですか。コーネリアは死つ……」

それはこの家で一番言っただけではない言葉でした。慌てて、コーネリアは言葉を切り、お父さんに聞こえてなかったか周りを窺います。風がさらさらとながれ、家の周りの木々を揺らしていました。人の気配はまったく感じません。深く目をつむり、コーネリ

アは心を静めようと思いました。

少女は言いました。

「何で言うのやめるの、言っちゃいなよ、コーネリアは死んでいるんだって。コーネリア「クロニクルは十年前の虐殺令により、喉を貫かれて死亡して言って！ 事実を無視しないでよ！」

突然の少女の剣幕にコーネリアは目を丸くしました。この家では言っただけではない真実を、激しい感情と共に吐く少女に、コーネリアは震えた声で聞きました。

「あなたは……誰ですか？」

「コーネリア、コーネリア「クロニクル……神様の子供、殺された魂を起源とする精霊……」

「どうして泣いているんですか」

コーネリアはかぶりをふりながら、言いました。

「泣いてないもん。怒っているだけだもん。お人形は、ばかばかだし、お父さんもばかばかだし、ああもう神様の裁きを受けてしまえ！ さつさと死んでしまえー！」

コーネリアはあまりの事態におろおろするばかりです。お父さんとお母さんの子供で、今は神様の子供だというコーネリアという少女。もし彼女の言葉通りなら、お父さんやお母さんが望んでいた通り、人形に込められないだけで戻ってきたことに変わりはないでしょう。

コーネリアはお父さんと呼ばうとしました。声を出す前に、お父さんは来ました。

少女のものすごい剣幕と、同時に出た大声に気がついたのでしょうか。呼ぶ手間が省けたと思うコーネリアにお父さんは言いました。
「ずいぶん、水汲みに手間取っているね。何か不具合でもあったのかい」

「お父さん。コーネリアが戻ってきましたよ」

お父さんは首を傾げました。

「何を言っているんだい。後、生け贄を十体近く集めなきゃ、魂を呼び戻す儀式は行えないんだよ」

「でも、来ているんです。そこで、すごく騒いでいますよ」

コーネリアはコーネリアの墓を指さしました。お父さんは不快そうに眉をひそめました。

「コーネリア、何度教えれば分かる。そこにコーネリアはいない、絶対いない。大体今だって、誰もいないじゃないか」

「そんな……こと」

コーネリアはコーネリアの墓を見ました。

ぐずついた少女が手の甲で涙を必死に拭いています。とても目立つ状態なのに、お父さんにはどうして見えないのでしょうか。

「だってコーネリアはお父さんの中で死んでないもの」

少女はかすれた涙声で言いました。

お父さんは深く息をつきました。

「何だかよく分からないが、水汲みを早く終わらせなさい。私も手伝おう」

「は、はい。ありがとうございます」

お父さんが先立って水を入れた桶を持っていくのを、別の桶を持ってコーネリアは追いかけてきました。最後にそつと振り向くと、コーネリアだと名乗った少女はじいいと二人を見つめていました。

「お父さん……」

そんな声が、ドアを閉める瞬間聞こえた気がしました。

第三の欠片 神様の子供

幼子の内に死亡した人間の魂は、神様の子供として強い加護を受けた精霊となる。神の命令に背くようなことがなければ、いずれは幸せな人生を約束された人間として転生する。

第四の欠片 コーネリアの心の呟き

お父さんは死んでしまう。

それを見届け、黄泉の使者に引き渡すのが私の使命で、お父さんの死はある物語の重要地点。お父さんが死んじゃうのが怖いなんて言えない。言っちゃいけない。重罪人だから。

この使命が終わったら、早く転生が出来ると神様はおっしゃった。

もうこれで悪魔生まれの神様の子供と馬鹿にされない、罵られない。私の幸せなんて、もう生まれ変わらなきや手に入らない。

でも、でも、ぎゅっとして欲しいよ。私のために間違っているって

……やだよ。

お父さんの中で、死なせてよ。

第三話

今夜の客人がやってきました。

「スワルニダゥウォーレンです。お会い出来るとは思っていなかったもので、大変光栄です」

お父さんと握手をして、スワルニダと名乗る青年は席に着きました。客人のくすんだ灰色の髪を見ると、コーネリアは野良猫を連想しました。しかし赤茶の目はつばらで可愛らしさを感じるくらいでした。コーネリアの外見年齢は十六歳くらいですが、それより五、六歳は年上でしょうか。少し昼間は暑く感じる時分にしては随分厚い長袖の上着を身に纏っていました。

お父さんも挨拶をして、席に着きました。コーネリアは客人にお茶を出すと、不思議そうに客人はコーネリアを見ました。

「美しいですね、ちっとも汚れてないとは」

感心したように呟きました。

コーネリアはにつこり笑って、部屋の隅に下がります。

客人は言いました。

「いい人形ですね。魂が安定していて、魔力で動く……こんな完成度が高い人形を見るのは初めてです」

この言葉にコーネリアは驚きました。お父さんはコーネリアが人形であることを客人にはわざと伏せます。

そしてコーネリアの姿に感心する客人に、もったいぶった口調で、コーネリアについて語ります。ただの客人ならば、コーネリアの美しさに言葉を失います。魔法使いや錬金術師等の客人からすれば、コーネリア程の完成度が高い人形は喉から手を出さんばかりのシロモノです。

ただの客人には、一晚の宿をすすめます。

コーネリアに見惚れる客人は、すんなりと同意してくれます。そして大きな鉈で殺されます。

魔法使いや錬金術師はコーネリアを売ってくれないかと交渉を願います。お父さんでは明日本格的にと、相手に期待させるそぶりです宿をすすめます。夜中に拷問をかけて、持っている知識を全部吐き出させると、燃やします。

魔法使いや錬金術師等、半分悪魔に魂を売り、異界に足をつっこむような行為を繰り返している人間の魂は汚れていて、儀式のための生け贄には向いていないそうです。ただ魔法の材料として使うには十分で、自分の魂もそういう類だとお父さんは言いました。

「ほう、この子が人形だと分かりますか」

「はい。ちよつと魂の定着法から想像がつかない程に、きれいな魂ですね。どうやったらこうなるのだから。僕の知識の範疇外の世界です」

お父さんは少し楽しそうな声を出しました。

「君はずいぶんと人形に詳しいね。魔法使いだと紹介されたが、それだけではないね」

客人は深く頷きました。

そして服のポケットから、小さな木の人形を取り出しました。

小さく呪文を唱えると、人形は動き出しました。木肌にはみるみると深い苦悶の表情が浮かび上がり、しわがれた声を出します。

「喉が焼ける、水を、いや……殺してくれ」

客人はコーネリアが出したお茶を軽く人形にかけると、安らかな顔で人形は目をつむり、ただの人形となりました。

お父さんは口の端を上げて笑います。

「面白いね。何だい、それは」

「たいしたことじゃありません。そこいらに漂う魂を人形に突っ込んだだけです」

「……君は異教徒かい？ 以前ここに来た行商人が、靈魂を人形におろす儀式を行う村があるのじゃべっていたが」

客人は小さく笑いました。

「今じゃこんなのは、すっかり異端趣味の大道芸に近いものになっ

てしまいましたけど。一応、神官です。こつちだと異教の、神おろしを得意とする家だったの。」

「どうしてこつちに？」

「神や大精霊を宿せるくらいの人形を作りたいのです」

客人はきつぱりとした口調で言いました。

「村を守るために。かつての村を取り戻すために」

客人の元々住んでいた土地は自然豊かで、同時にとても厳しい場所だそう。大人の男の身の丈を越える程の雪が降り、春は溶けた雪から出来る豊富な水を使って、畑を作り作物を育て、夏は時には日照りを起こしかねない太陽から守り、秋は台風に備えながらも収穫して、冬は雪に耐え、春を待つ、そんな村だそうです。豊作も飢饉も引き起こす自然は、村人にとって崇拜と畏怖の対象で、自然にまつわる神様がたくさんいるそうです。

客人の家は神官として代々、神おろしや様々な儀式を取り仕切ってきました。

春は鋤を畑に打ち込んで、冬の間眠りについた豊穡の女神を起こし、今年の収穫を神に伺う神おろしの儀式を行い、夏は春に払った木のよけいな枝を干してまとめ、火をつけ練り歩くことで、虫払いをしつつ村を清め、秋は収穫物と酒を供えて一晩中馬鹿騒ぎする祭りで神全員を慰め、冬は眠りにつく豊穡の女神を、鋤を神殿にしまうことで見送っていたそうです。

しかし神様は唯一という宗教を信じるこの国では多神教は迫害されていた。特に十年前の虐殺令に反対したことから顕著になっているそうです。

「僕らの教えでは、七つまでの子には神が宿ると考えられています。聖人の存在が国を脅かすからと、幼子全員を殺すとは、僕らにとつて何よりも禁忌なことの一つでした。神官の長だった父は村の代表として、王に面会し反対して、殺されました」

国境警備のために成人男子は全員出兵。神域の取り壊しや放火。実

りきつていない作物を収穫して燃やすということもありました。そして一神教教育、邪教としての儀式の禁止。村の、人々の内面を荒々しく踏み荒らす行為を国は行ったそうです。重苦しい声で客人は言いました。

「何としてでも村を守り、かつての村を取り戻したいのです。そのためには人形が必要なのです」

お父さんは少し困ったような顔で頷きました。

「コーネリア」

いきなり声をかけられ、目を丸くしながら振り返ると、お父さんがいました。

「お話、終わったのですか」

「ああ。いつのまにかこんな時間になっているとは」

お父さんは頭の後ろをかきながらばやきました。お父さんと客人は随分と話が盛り上がっていました。普段はじつと部屋の隅で、会話する様を見ていたりしますが、今日ばかりは席を外した方が二人は楽しめるかもしれないと思い、そつと場を離れていました。コーネリアは恐る恐る聞きました。

「今回の客人も、ですか……」

「スワルニダ、彼はきつと、きつと全てを理解しているだろうね。」

神から人間まであらゆる魂が見えると言っていたよ。うらやましい力を持った青年だよ」

生かしておこうとお父さんは言いました。

「足の健でも切って、動けなくして、コーネリアの魂の定着に協力してもらおう」

「そう、ですか」

コーネリアはお父さんの言葉に、顔を伏せました。客人はお父さんと形は違えど、十年前の虐殺令の被害者です。

いわば同じ傷を持つ者同士、何も思わないと言えないでしょ

う。お父さんは言いました。

「コーネリア。情けは無用だ。いやそんな感情……持つてはいけないんだよ」

お父さんは苦々しく顔を歪めて言いました。

その言葉はコーネリアに言い聞かせるような、自分に言い聞かせるような、言葉でした。

そこにふわりと、白いワンピースの裾をふくらませながらコーネリアが床に足を置きました。

「お父さんの、馬鹿」

開口一番、コーネリアはお父さんの袖口を強く握りながら言いました。

「コーネリアはここにいるのよ。気付いてよ、認めてよ。死んだつて。そうすれば見えるのに。お願い、お父さん。もう、限界……」

がたがた肩を震わせコーネリアは膝をついて自分を抱きしめました。お父さんはコーネリアに見向きもせず部屋を出ていきます。道具の準備でもしにいくのでしょうか。

コーネリアはすぐにコーネリアに近寄りました。

「コーネリア、大丈夫ですよ。お父さんはいつか理解します。何とかしますから」

「無理だよ、無理。あんたじゃ無理」

「そんなことはありません。きつと何とかします。人の命を狩つて、あなたを復活させるなんて、む」と言いかけて言葉が急になくなりました。首には手がかけてられています。木の手です。

「可能だと、ずっと期待していました」

冷たく楽しそうな声が耳元でした。自分の声でした。

「今も期待して、楽しみです」

「コーネリアの魂がこの身体に宿れば。私は私になれる。娘になれ

る、愛してもらえる」

「愛されるためなら、誰が死んだってかまいませんよ」

「コーネリア。貴方のおかげで私はこの身体に入ることが出来た。だけど貴方のせいで頑張ったって、私は本当の娘になれない」

「愛して、愛してよ。頑張るから、コーネリアになるから。寂しいよ、愛が見えないよ」

ぶつぶつと言っではいけない言葉を吐く自分がいました。あまりの事に動けません。

コーネリアは絹を裂くような高い声で言いました。

「あんたって何なの。ずっと、不思議だったよ。ねえ、あんたの中ってどうなってるの。どうしてそんな綺麗な言葉が吐けるのよ！

あんたの中身ってそんなに綺麗なの！？」

「あ……ああ」

ただ声を漏らすことしか出来ませんでした。

するとコーネリアの胸元から白い光が溢れ出しました。

「いいよ。もう自分で調べるから」

その言葉が耳に届くと同時に、私は白い光に飲み込まれました。

第四話

私はこの身体に入る前、ある令嬢の誕生日プレゼントとして贈られました。その頃の私は金の緩やかなウェーブのかかった柔らかな触り心地の髪に、エメラルドを溶かして混ぜ込んだガラスの目、白のビロードのマントに、深紅のドレス、頭の上に小さな王冠をのせていました。その国で絶大の人気があった女王様をイメージして作られたものだったそうです。私の主である小さな令嬢は、私に名前をつけてくれました。

ローズマリー・クレンジア。

私は令嬢の国の女王となりました。

令嬢の名前も顔も実はもうおぼろげです。

ただ声が愛らしくて、たどたどしい口調で私や自分の小さな国、クレンジアの物語を語りました。建物を置き、ぬいぐるみや人形に名前をつけて、役割を与え、話をふくらませました。

令嬢の口から語られる物語は泡のように儚く、都合よく設定は紡がれ、そして令嬢の氣にいらぬもの、記憶の端にもかからぬものは、忘却の黒い穴へと落ちました。

令嬢の心一つで変わる、不安定な世界。でも私は楽しかったのです。

白いウサギのぬいぐるみのカリルは、私の忠実な大臣。王国に何かある時、巻紙を開いて国民へ命令を發布します。同時に私とは幼なじみで、時々薔薇を贈ってくれるのですが、不器用という設定のために、毎度手を傷付けます。私は毎度魔法の力で、カリルの傷を癒します。私は令嬢の設定上、何でも魔法で解決出来る程の力を持ち、国の誰からも愛されていました。

また素焼き人形のヨークは寡黙だけれど腕利きのパン職人で、おいしいパンを毎朝、王宮に献上しました。陶器の人形クレアは美しい

花売りで、時々王宮を抜け出す私をかくまい、街を案内してくれるのです。細やかな陶器の道具で、私の生活は彩られています。時々恐ろしい魔獣が牙を剥いて、クレンジアを襲いますが、私は魔法の力で魔獣を退治し、国の民からたくさんの支持を得ました。

どんなピンチでも絶対に勝つ。国にいる誰からも愛される。

絶対に消えない設定つまりは「令嬢の物語の支柱であり、令嬢の心の鍵でした。

令嬢を私は愛していました。

それはとくに決まっていた設定でしょう。刷り込みというものに近いかもしれません。

愛さなければ、愛を返さなければ……捨てられる。私はこんな発想を持つていました。理解していたのです。

「物」だと。「道具」だと。

だから私は精一杯人形をやりました。

たとえこの身の魂は人形でも、私は令嬢のためなら、何でも出来るのです。この身を令嬢に捧げているのです。

それが、私が私であると証明する唯一のことでした。

将来のためとお父様とお母様から離れて、一人、お父様の信頼が厚い従者の元で勉強し、礼儀を習い、寂しいなんて口にすることが弱さの証明となると、上品に扇で口を隠す小さなレディ。小さな大人、イエを飾り、イエをつなぐ生きた家具。令嬢は時折、私をぎゅっと抱きしめます。

月明かりも届かぬ部屋の奥、暗闇の中。

声も出さず、泣きもせず、ただ腕に強く力を込めて。私は令嬢の心にぴたりと寄り添い、彼女の心の海で、泡として浮かぶことも許されない心をたくさん、味わいました。

それは寂しさを纏いながら、木々の隙間からのぞく柔らかな煌めきに反射して落ちるガラスの欠片のようで、私は令嬢の心と共鳴しながら、触れては消える欠片を掴もうと手を伸ばしました。

私は「物」ですから。

私は「道具」ですから。

だから本能的に運命を知っていたのです。

私は壊れるという物質的なこと以外で時を持たないのですから。令嬢は成長することも止められませんから。

無駄なあがきとしても、令嬢の心に寄り添うだけではなく、つながりたかったのです。彼女の心の一部として、溶けてしまいたかった私の死が、令嬢の心の死になってしまえばいい。黒い鎖でお互いを縛って、連理の枝に結びつけて、心中しましょう。

私はそれくらい愛しています。

感情という糸で縛って、いいように扱って、私を必要として。

愛して〃存在させて。心の側にいさせて。

ただどんなに願っても、令嬢は大人になってしまった。

……令嬢が立派なレディとして社交界のパーティーに出かけるようになる、私の国が令嬢の部屋に広がることはすっかりなくなり、私は置物の一つとして、部屋の隅で飾られるようになりました。やがて古くさいという理由で捨てることが命じられ、哀れに思った給仕の一人がおもちゃ箱にそっと入れて、物置の片隅に置きました。

どれくらいの時間がたったのでしょうか。

暗い箱の中でぎゅうぎゅうに押し込まれて、前にはウサギのぬいぐるみの大臣がいます。ウサギの黒い瞳は、深い茨の森の奥にあるという底なし沼の色のようによどんでいます。

ウサギの大臣の隣のパン職人の土人形は、首が取れて荒い土の肌を

さらしています。花売りの陶器の人形はどうなったのか分かりません。令嬢の物語がまだ残っていた人形たちのかすかな意思を辿って、このおもちゃ箱の中にいることは知っていました。探すにしても身動きはとれない上に、ほのかに箱の隙間から入る日光のみが明かりという状態では、探すことは叶いませんでした。しかし少し前に、陶器が砕けるような、重くて高い音が聞こえました。

私は私の、人形としての人生が終わりに近づいているのを感じていました。他の人形やぬいぐるみのように、令嬢の物語を忘れたりすれば、私はもう死ねました。何も感じることもなく、ただ朽ちることが出来ました。

でも私には、出来なかったのです。

「ローズ、ローズマリー」

初めて出会った時に、頬を真っ赤に染めて私を抱きしめて名前をつけてくれました。何度も私の名前を暖かな声で呼ぶ令嬢に、私も心の中で何度も令嬢の声とあわせて、自分の名前を呼びました。私はこの瞬間に生まれました。貴方のおかげで生まれました。

「貴方は女王様だよ」

金の小さな冠を頭にのせてくれた時の嬉しそうな笑みを浮かべました。女王として令嬢の物語に加わることも出来ました。

夢見がちな令嬢の物語、時に周囲から幼いと馬鹿にされても貴方は私たちを守ってくれました。貴方が成長してしまうまでは、楽しかったですよ。

私は最初から特別な魔法の力を持ち、国民全てから愛されるという設定を持っていました。それは、貴方の願いだったのですね。無条件ですごい力と愛を与えられるという子供らしい設定。私は令嬢の自己満足に力を貸せましたか。

私に出来ることはそれしかありませんから。

令嬢の気持ちは今も昔もあまり分かりませんでした。

私は「従属」するだけなのです。人形としての本分を尽くすのみでした。だけど朽ちるだけの今の状況を考えれば、令嬢は令嬢としての道を歩んでいるのでしょうか。

家を守る、繁栄させる、そのために良い結婚をし、子供を生むのでしょうか。

「頑張る、頑張る……よ」

私を抱きしめながら、辛そうに寂しそうに呟き、自分を励まし続ける令嬢。あの頃の令嬢は、もう令嬢の中で死んでしまったでしょう。私も過去の遺物に過ぎないのでしょう。

私は忘却の淵へ落ちた過去の令嬢の、形見なのでしょう。

ああ、なんて悔しい。悔しくてたまらないのです。

存在したかった。令嬢に愛されて、存在したかった。

過去の遺物、形見になんてならず、令嬢の側にいたかった。

一緒にいたかった。大好きでした。その心と繋がりたいくらいに愛していました。

もっと、もっと令嬢の期待に応えられる身なら。

成長していく令嬢の要望に柔軟に応えられるだけの身なら。

動かない体が憎い。言葉を紡げぬ口が憎い。

令嬢に優しい言葉をかけることも、抱きしめることも出来ない。

完全に期待に応えることが出来たなら、私は愛されて存在することも出来て、ずっと側にいられただろうに。

……処理の時間がやってきました。

物置のごみを片付けなければいけないという、下男や下女の声が聞こえます。おもちゃ箱から投げ出され、爆ぜる音を出しながら燃える炎に落ちました。髪がくさい臭いを出しながら燃えます。全身か

らも鼻をつまむような醜悪な臭いを、止め処もなく放ちながら燃えます。もう、この身体は死にます。

私は自分を燃やす炎を、ガラスの目に焼き付けました。

自分の無様な死に様を忘れぬように。もし、もう一度生まれ変わるならば、私は完璧に期待に応えよう。頑張つて、頑張つて、期待に応えよう。

そうしたら、一生壊れるまで、愛してもらえる。ずっと側にいられる。そうですよね、令嬢……

第五話

私は目を開きました。部屋の床に倒れていたようで、私は頭を押さえながら何とか立ち上がりました。

意識を失ったまま、朝を迎えたようです。

強く鋭い朝の日差しが窓から差し込んでいます。

「何で。もう朝なの？」

もうスワルニダという青年は、お父さんに捕まってしまったのでしょうか。

ごめんなさい。コーネリアをおろすための礎になって下さい。

私は本物の娘になりたいのです。

「朝食、作らないと……」

私はよろめきながら、台所に向かいました。

今日は何だか変な気分です。確かに夢で自分の過去を振り返ってしまったのですが、それでもここまで感傷的な気持ちを朝起きた後まで引きずることは、ほとんどありませんでした。

お父さんが心配してしまう。お母さんの要求にうまく応えられなくなるかも知れないと、おびえに近い不安を私は感じました。

台所に行くと窓から強い光が差し込み、磨いた木の床やテーブルに鈍く反射しています。何でしょうか、この感覚は。歩いていて、ガラスの目に映る景色が急に遠くなったり、近くなったりして落ち着きません。これは眩暈というものでしょうか。初めてのことでした。私は食卓のテーブルの端を掴んで片手で頭を押さえながら、周りを見回します。今日は本当に良い天気で、自然と気分が盛り上がりそうなくらいです。

けれど何故、嘘くさく感じるのでしょうか。まるで夢の中で目覚めて夢の中で動いているような感覚です。こんなのあるえないという拭

えない違和感を抱きつつも、テーブルを掴む感覚は本物でした。

「お父さん」

思わず呟いて、私はふらつきながら歩き始めました。

お父さんの姿を見て、話をして、現実感を取り戻そうとしたかったのです。ドアノブに手をかけると、何もしていないのにドアノブがぐるりとまわりました。誰かと思いつつ私はドアから少し離れ、ドアを開けて入ってくる訪問者を見ました。声を失いました。

私がいる……いえ、私じゃない。

私とそっくりな人間。

「さて、朝食を作らないと」

私とそっくりな少女は軽やかな声で言い、私の横を通り過ぎました。少女はお湯を沸かし、パンを切り、スープの味を確認しながら簡単な朝食を作ると、台所から移動し、人形の工場にいたお父さんと死んだはずの母さん呼びました。

そして三人は食事をとって、話を弾ませていました。

少女は本当に私とよく似ていました。

姿形、声だけではなく、行動や口調も驚くほど私でした。

人間の、私……迷いのない私？

でも、何だろうこの違和感は。

私は気付かれないことを良いことにそつと少女の頬に手に触れ、顎にむかつて滑らせました。滑らかな肌です、陶器のような、でも押すと跳ね返る張りのある柔らかい肌。

目も押せば柔らかいのでしょうか。私のガラスの瞳のような硬いものではなく、押せばぐちゃぐちゃに潰れるのでしょうか。

「そうか、コーネリアは本当に良い子だね」

「コーネリアと話していると、本当に楽しいわ」

お父さんとお母さんは口々に言いました。

こんな気の抜けた表情で話す二人は初めて見ました。

もしかして……お父さんとお母さんのコーネリア、なのでしょうか。私がまだ目覚めたばかりの頃、お父さんやまだ正気を保っていたお母さんはコーネリアに関する様々な話を私にしました。きっと大きくなったら、こんな子になるはずだったろう。

両親思いの優しい子、穏やかな雰囲気を纏った子になるはずだと言いました。だから私は、その言葉に従って、コーネリアになろうとしました。

ただど前の記憶が、ローズマリーという心が、コーネリアという仮面に少しずつ亀裂を広げていって、両親に悟られる程に私は……期待に応えられなかったのです。

私は思わず呟きました。

「やめて、やめてよ」

自分の愚図ぶりを、はつきりさせるようなものを見せないで。

「嫌、こんなの嫌……お父さん、お母さん。笑わないで！ この子に、笑いかけないでよ！」

私の出そうとした言葉を、聞き覚えのある少女の声で誰かが言ってくれました。

コーネリアのオリジナル、今は神様の子供という精霊の身の少女がぎりぎり拳をつくって叫んでいました。

「もしもの未来は、全然違うの……そんなのお父さんとお母さんの理想なの。私は……私を受け入れて」

コーネリアの隣で、私とよく似た少女が立っていました。

快活そうな、きらきらした目、少し寝癖で跳ねた髪。服の着方も、私や理想のコーネリアと違い着崩しています。今すぐ畑に行って、鍬で土を耕していそうです。

これは一体……そう考えていると、コーネリアのオリジナルの横にいた少女は動き出し、理想のコーネリアに触れました。その瞬間、

霧散しました。さらさらと散っていく少女の間から、泣くコーネリアが見えました。

私はコーネリアに近寄り、そつと頭の上に手を置いて、目線をコーネリアにあわせて尋ねました。

「どうしたのです。コーネリア」

「私じゃ、もうお父さんとお母さんの子供になれない。あんたは前の記憶を持っているけど、お父さんとお母さんの理想にあわせられる。だけど私のもしもの未来は、お父さんとお母さんの理想からずれて、こんなありえないって消されちゃう。本物なのに、消えちゃう。やだ、やだ、見てよお」

コーネリアの横から、さつき理想のコーネリアに触れて霧散した少女がどんどん現れます。

何度も理想のコーネリアに触れて、霧散し、お父さんやお母さんに話しかけては無視され、触れれば、理想のコーネリアに触れた時と同じように霧散しました。

「お父さん……お母さん」

弱々しい声で呟き、膝をつくコーネリアを私は抱きしめていました。何故だか、急に腹立たしい気分になりました。お父さんとお母さんに対して。私は理想のコーネリアと楽しげに話すお父さんとお母さんを睨みました。

私はかつてローズマリーであった時、自分の存在を過去の遺物として葬り去られました。忘れられて、過去の思い出を何の感傷もない程に繰り返し思い出すしなくて、そんな自分が惨めでしょうがありませんでした。もう一度抱きしめてもらいたい、声をかけて欲しい。

愛して、愛して、存在させてください。

その渴望は、深く私の中でうごめいていました。

だからほんの少しだけ、コーネリアの気持ちが理解出来たのです。この子は思い出がないだけで、愛と存在を渴望する私だ。

本来愛される筈だったコーネリア。だけど殺されて、その瞬間から彼女の未来は現実になく、お父さんとお母さんの頭の中で成長するしかなかった。

その想像の果てに生まれたのが「私」

けれど本来あつたはずの未来は、お父さんとお母さんの理想とは違っていた。

違っていた未来は、存在出来ない。始めから、ありえないから。そんな身勝手な話。

「ふざけないで、こんなのないわ。ない、ない、ない！」

私は叫びました。

「お父さん、お母さん。コーネリアを見て、見てください。どうしてもその子を見るの！理想じゃなきゃ駄目なのですか？そうじゃなきゃ視界の端にも入らないのですか」

この子は私のような生まれじゃない。人形は愛されなきゃ存在出来ない。

だから「従属」するのは当然で、理想を投影されるのは、当たり前。だけど、この子は元人間。人間が誰かの想像でひとくりされる程、単純な訳がない。

お父さんが私をコーネリアと呼びながら「私」という人格があることを認めているのは、そうした方が楽だから。お母さんはその葛藤に耐えられなくて、粗末な人形をコーネリアとし、やがて現実に耐えられず首を吊ってしまった。

思い出は確かに思い出し過ぎると、かすれて感情も湧き上がることすらなくなってしまう。ただ思い出がきらきらしていることは確かで、まるでビー玉だ。決して中がもれないと分かりつつも、舐めて齧って、むなしくて寂しい。

けれど、それって地獄だけれど、何も思い返すものもなく、乳を求める赤子のようにお父さんとお母さんを求めるコーネリアの渴望だけの地獄は、背中が寒くなる。

「お願いします。見てください、存在させてください」

私の腕の中で、泣いていたコーネリアは目を腫らして、頬や額を真っ赤にしながら私を見ました。

「……貴方がそういうこと言うと思わなかったよ。だけど分かっていたの、教えられていたから。知れば知るほどに不幸になるって。私はもう死者だから。死んだ後の物語は、生きている人たちによって勝手に創作されるって。でも、でもお」

「諦められません、よ。私も令嬢に壊れる最後まで愛されたかった。存在したかった。おもちゃ箱に入れられても、いつか、いつかはきつと……って」

悔しかったのです。期待に応えられない、ただの人形である我が身が。同時に恨めしかった。愛してもらいたくてしょうがなかった。その手を伸ばして掴んで欲しい。

コーネリアは言いました。

「私思うんだ。人形もね、一人では生きられないくらい小さい子と同じだよ」

「どういうことですか？」

ぎゅっと強く私の体に腕を回して、コーネリアは言いました。

「存在が許可されなきゃ、生きることが出来ない。捨てられちゃう。後、生きられるかどうかは、運しだい」

続けてコーネリアは言いました。

「でもどんなことをされても、求めちゃうの。私、神様の子供として失格なんだよ……」

コーネリアの胸元からまばゆいばかりの光が溢れ出し、私を包み込みました。

第六話

はたつと意識を取り戻すと、体に重みを感じました。誰かに抱きしめられていました。お父さんでした。

「お、お父さん」

びっくりしながら声をかけると、お父さんはかすれた弱々しい声で言いました。

「コーネリア。良かった、無事で。君まで消えるなんて、耐えられなかったよ」

「何を言い出すのです。お父さん」

そこで私はお父さんが傷だらけなのに気付きました。そして自分のお腹付近で奇妙な濡れを感じ、私はそつと自分のお腹をなでて、肩が震えました。血がたくさん、手に付いたのです。

「何これ……」 血の出元は、お父さんのお腹でした。しかしお父さんは私の驚きもかまわずに言いました。

「早く逃げなさい。スウルニダが、君の身体を狙っている。神おろしの人形にするつもりだ」

私は何としてでも、必要と言ったスウルニダの姿を思い出しました。深い決意を固めているようでしたが、まさか、こんな……誰かがぶつかる激しい音がドアの方から聞こえます。私は部屋のドアを見て息を吞みました。血で奇妙な文様が描かれていました。たつぷりと血のついた刃物がドアの前で転がり月に照らされています。

「お父さん、一体何を……」

お父さんは小さく笑いました。

「血で結界魔法を、描いただけさ。あの男は強い。私じゃ君を守れない。逃げろ、今すぐ」

お父さんのお腹からは血がだらしなく流れ続けます。まだしゃべる余力は残っているようですが、早く何とかしないと、ぞつと寒気が全身を駆け巡りました。私はせき込みながら言いました。

「何をやっているんですか！ お父さん、貴方が逃げて！ 私は人形です。だから作り直せる。今は逃げて、新しい人形を作ってください。私の代わりを貴方はつく」

そこで私は息を吞みました。

お父さんはにこつと笑っていたのです。そして、こう言ったのです。
「僕はね、君がいなくなったら嫌なんだよ。コーネリア、アイリスだけではなく、君すらもいなくなった世界で、生きていけないよ」

「だけど私はコーネリアじゃ……娘になりきれない、お父さんの希望に添えなかった……人形です」

お父さんは少し視線を下げて言いました。

「スワルニダに、自分の持つ精霊や神をおろす術のノウハウを教える代わりに、君をくれと交渉された時に、はは、すごく嫌だったんだよ。ノウハウを教えてもらえればぐつと、コーネリアと再会する道に近づけると理解していたのに。今までの思い出が駆け巡ってね。君を渡したくなかった。いつのまにか、君も僕の本当の娘になっていたんだよ。そしたら実力行使だつて、僕が今まで殺してきた人間の魂を人形にこめて襲ってきた。はは、恨みとはすごいね。勝てない……それだけのことを僕はやってきたのか。コーネリアを殺した王と、何も変わらない。被害者面した加害者って奴だったのか……はは、無様だ」

お父さんは私の頭を優しく撫でました。

でもね、君と出会えて良かったよ。

守るために血を流せて良かったよ。

声の力がゆつくりと弱まってきました。私はかぶりをふりながら言いました。

「それ以上、しゃべらないで。逃げるなら、一緒に逃げよう。お父さん、お父さん。お父さんが死んじゃう、このままじゃ死んじゃう、置いていかないで」

「お父さん。死んじゃうの……」

私を抱きしめるお父さんの後ろに、コーネリアがいました。私は何も言えず、下を向くことしか出来ませんでした。血は私の服を赤黒く染めています。私はそつとお父さんの頭を膝にのせました。涙を流せたらいいのと思いました。

この熱した鉄ごてを胸に押しつけられているような痛みを、もっと表情で伝えられたら、お父さんは黄泉の門を叩かずにすむかもしれない。足を止めてくれるかもしれない。ううん、違う。私はただ悲しくて感情につぶされそうで、それを体の外に出したかったのです。「自分でお腹刺して……良かったね。ローズマリー……愛されてるじゃん」

コーネリアは意識が霞んでいるお父さんの手にそつと触れました。寂しそうに悲しそうに。するとコーネリアの手をぎゅっとお父さんは握ったのです。

「君は……誰だい」

目を丸くして、それから恐る恐るといった感じでコーネリアは言いました。

「コー…ネリアって言ったら、信じます?」

お父さんは血を口からこぼしながら言いました。笑っていました。

「急に何を言い出すんだい。コーネリア。母さんがご飯を作って待っているよ。新しい家族も紹介しなきゃね……君と同じ名前の命を持った人形だよ。はや、く、い」

そこでお父さんの言葉は途切れしました。

コーネリアは目を見張っていましたが、みるみるうちに涙が目の縁にたまり、やがて止めどなくこぼれました。

私はお父さんのぎゅっとな手を握って、吐き出さなくなるような感情

を必死に押し殺しながら言いました。

「私、逃げます。絶対、生き延びます。お父さんの言いつけ守ります。そうじゃなきゃ、そうじゃなきゃ……お父さんの命が無駄になっってしまう」

私は立ち上がり窓を開けると、そこから森へと出ました。

第五の欠片　お父さんの気持ち

意識が霞んで、腹を中心にして全身にある痛みも遠くに感じた。身体が異様に重い、ああ死ぬのだと実感した。

もうこれではコーネリアを呼び寄せることが出来ない。

身体を捨てて遠い場所に行ってしまったコーネリアを呼び戻さないといけなかったのに。

そこでふと、いやようやく気がついた。

首を深く刺されて、どうして死の結末以外の道が辿れるのだろう。死へと落ちていく、黒い手が私を地獄へ導こうとしている……もう生へ決して戻れない……そうなのだ、死者は戻らない。

コーネリアは死んだのだ。

ふと小さな手のひらが私に触れた。

見ると十歳程度の女の子がじつと私を見ている。

名前を聞けばコーネリアという……ずっと探していた娘がそこにいた。ああそうだったか。君はそこにいたのか。

遠くで人形のコーネリアとお母さんが待ってるよ。

さあ行こうよ。

第七話

真夜中の森を駆けていきます。

地表に浮き上がる木の根に転んだり、枝葉に身体が傷付いたりしますが私は気にせず走り続けました。身体を動かす魔力がこぼれることや、身体が壊れてしまわない限り、私はどこまでも動けます。いや、動いてみせます。

私は、お父さんが命を懸けてくれた人形。

お父さんの最後の願いに従属します。

それしか、出来ないのだから。

お父さんに報いることが出来ないのだから。

必死に走っていると、泥で滑って転びました。血と泥が激しく服に付着し、身体は重くなりました。

逃げないと、逃げなきゃ、私は顔に付いた泥を拭って、何とか立ち上がろうとしました。

するとその時に、木の上から何か降ってきました。思わず身をすくませて耐えると、目の前に顔も何もない、無骨な木地まるだしの人形が私の前に立っていました。人形は私の腕を強く掴み、そして木の軋む音によく似た声で言いました。

「どうして、お前だけ生きている？」

「帰りたいよ、帰りたい……ヨシアを抱き上げたい。どうして俺が、俺が何かしたのか」

「熱い……寒い」

人形は私の顔にぐっと顔のない自分の顔を寄せました。木の皺が苦悶に満ちた、やけどの水脹れを潰した跡やかさぶただらけの顔に見

えました。

「死なせて……」

そこでがらがらと人形は崩れ、男の人の声が響きました。

「そこにいたんですね。探しましたよ。コーネリアさん」

他の人形に身体を押さえられながら私は尋ねました。

「どうしてですか。どうしてそこまでして、私の身体が必要なんですか。父に教えを乞いて、貴方の村の人間と協力して作ればいいじゃないですか」

スウルニダは小さく笑いました。

「ご冗談を。尋ねても教えるつもりはないでしょう。だって僕は材料だから。本物のコーネリアをおろすための儀式の材料。神が教えてくれました。それに僕は急いでいるんですよ。だって、早く村に戻ってやらなきゃいけないことがあるんです。早くやらないと、気が済まない」

苦しげな息をもらして、スウルニダは冷たく笑いました。そんなスウルニダの様子に私は既視感を覚えました。お父さんと同じ匂いでしたのです。

「貴方はただ、村を救いたくて行動しているようには、見えません」「そんなことはないですよ。ただ僕は救いたい、かつての村を。十年前の一件以来、この国に媚びて尻尾をふる村なんて、直さなきゃいけないんです。父の決意に賛同しながら侮辱し、なかったことにしようとするあいつらを……僕は直さなきゃいけないんです」

スウルニダは袖をまくりました。

二の腕に、くつきりと奴隷につける焼き印が押されています。スウルニダは近づいてきます。何か呪文のような不思議な言葉を唱えながら。

「ちゃんと返さないといけないのです。痛みや侮辱を。そうしなければ、始まらない」

「ううん。違うよ。貴方はここで終わりだよ」

「そして終わるの。こんな気持ちの悪い被害者の物語は」

第八話

スウルニダや人形達が、唐突に姿を消しました。

コーネリアがそつと、木々の間から現れます。重苦しそうな顔をしていました。

「何をしたのですか」

私が尋ねると、コーネリアは近くにあった石を持ち上げ、消しました。石はほんとに私の前に落ちました。

「世界の最果て。誰も未来永劫近づくことが出来ないくらい潮の流れが複雑で速い島に人形ともどもとばしたの。社会的な意味じゃ、殺したも同然かな」

コーネリアから軽やかに舞い落ちていた金のりんぷんが急になくなりました。コーネリアを常に包んでいた明るさが消え、森の木々の陰が濃くかかります。コーネリアは薄く笑いました。

「はは、消えちゃった。神様の加護消えちゃった。もうこれで生まれ変われないや。本当に神様の子供失格だね」

私はコーネリアの肩を掴みました。

「つまりそれは……」

嫌な予感が喉元からせり上がってきました。

泣きそうな顔をしてコーネリアは言います。

「神様はスウルニダに祝福を与えました。人の道を誤った人形士に神の制裁を、そして人形を正しき神の道具として生まれ変わらせ、墮落した人々に制裁を、そして彼は異教の神の地に私達の神様の信仰の道を開く。スウルニダは本来自分にとっての異教の神である私達の神様に忠誠を誓ってまで、復讐しようとしていたの。自分達一族を歴史ごと侮辱した村人にね。だけどその物語を私がぶち壊した。禁忌を犯したら、制裁される。私はもう、生まれ変われない。精霊として未来永劫、大地にさまよい続けなければいけない」

「いいのですか、それで」

「本当はよくないけど、でも許せなくて。スワルニダや、お父さんに死の制裁を与えた神様が許せなくて。でも殺す力は持ってないから、こうするしかなかった」

「そうですか……ねえ、コーネリア」

私が声をかけると、途方に暮れたような顔をしながらコーネリアは首を傾げました。

今までの刺々しい雰囲気はなく、十歳程の姿形相応のあどけないものでした。

「何？」

「とりあえず、家に帰りましょう。お父さんを埋葬しなければ。そうしたら一緒に旅に出ませんか。貴方が大地をさまよい続けなければいけない運命なら、私もついていきます」

目をきよとんとさせて、それからコーネリアは吹き出しました。思わぬ反応に、私は背中をただして言いました。

「突然笑うつて、どういうことですか」

「だって、貴方今の姿自覚してる？」

「今の姿つて……あ」

泥やお父さんの血がべったりとついて、森を転びながら走ったせいで、あちこち傷ついていました。そして立ち上がろうとしたとき、膝の部分が壊れてしまったのが、上手く立ち上がることも出来ませんでした。

「ひどすぎる」

思わずぼやくと、コーネリアは頷き返しました。

「貴方は人形なんだよ。これだけの立ち回りをしただけでも、異常なんだから。今までの狭い世界から旅に出るだけでも負担が大きい」

「……そんな。貴方を放っておけないですよ」

いえ、それだけではないのかもしれない。寂しくなるのは、大嫌いなのです。

一度離れたら、もう二度と会えないのでは。

けれどお父さんの調整もなしで、自分はどれだけ壊れずにいられるだろう。

一気に不安が押し寄せるのを感じました。

お父さんが死んだ事実が深く身にしみて、思わず自分を抱きしめま
す。どうすればと考え込む私にコーネリアは言いました。

「ねえ、もし旅に出るなら未来永劫側にいてくれる？ 嫌なんて言
わない？」

「どういうことですか」

私が聞き返すとコーネリアはじつと私を見ました。

「貴方が収まっている、その身体。スワルニダも狙うくらい特殊な
の。神や精霊をおろす用の人形に、きちんとした儀式ではなく、血
を使った召喚術っていびつな方法でおろしているから、召喚者に害
をなす悪魔が入るわけではなく、人間の魂でもなく、人形の魂であ
る貴方が入った。でも、多分もつと入るの。私が入れるくらいに、
強い身体なの。私が貴方の身体に入れば貴方はただの人形では無く
なる、人間なんて超えた人形になれる」

そつと、コーネリアは私の頬に手を添えました。真剣に私の顔を見
つめます。

「私と永遠にいてくれる？ もう寂しいのは嫌なの。別れたくない
の」

夜は終わりがけていました。

昇りかけの朝日と沈みゆく夜の闇が入り交じり、藍色の空に桜色が
混じる不思議な空でした。これから朝日の勢いは強くなるでしょう。
そう朝、長い夜が終わろうとしているのです。一晚であり、十年前
から続く長い夜が……血と制裁を持って絶たれました。だから私は
私の出来ることで、朝を迎えないと……逃げまじょう、さまよい続
けまじょう、世界が終わるまで。コーネリアと一緒に。

私は言いました。

「分かりました、入って下さい。ただ入る前に、自己紹介させて下さい。私の名前はローズマリー」クレンジア。永遠によろしく願います」

最終話 コーネリア

いつの頃からか。こんなお話が流行しました。不思議な女が一人で旅をしていると。獣がいる森も軽々過ぎて、神というものも信じず、いつも楽しそうに会話のような独り言を呟いていると。ただのキチガイの旅人と思えば、女の不思議な力で重病人が病から回復すると。コレしか出来ませんと呟きながら、どんな人間も癒すのだと。けれども治療されても、誰も旅人が女という以外決して何も覚えていませんでした。

そして今日も彼女たちは、世界をさまよい続けているのです。

おわり

最終話 コーネリア（後書き）

このお話は「人形が両親に愛されたくて、必死につくす」という状況を図書館で簿記の勉強中に突然思いつき、そして興奮して書き上げたものです。

本当読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1088k/>

コーネリア～人形と神様の子供～

2010年10月10日11時54分発行